

実践女子大学山岸文庫蔵耕雲本『源氏物語』の用字 — 仮名字母と表記の比較を通して —

齊藤 鉄也

一 はじめに

本稿では、実践女子大学山岸文庫蔵耕雲本『源氏物語』（以下、山岸文庫本）と高松宮家本『源氏物語』（以下、高松宮家本）を対象として、それらの写本間関係の調査結果を報告する。両写本の関係については、二つの仮説が提案されている。一つは、山岸文庫本は高松宮家本と親本を共にする「兄弟関係」説¹、²である。もう一つは、山岸文庫本は高松宮家本の親本である「親子関係」説³である。本調査では、写本本文の仮名字母の出現傾向と表記の類似性の視点から、二つの『源氏物語』写本を比較し、両説の蓋然性を検討する。その調査方法として、本文の仮名字母の出現傾向と表記に対して統計的分類方法を用いる。これまでに、この調査方法を用いて、『源氏物語』写本の書写者の推定や類似する本文の指摘を行い、写本の位置付けを明らかにしてきた⁴。本稿においても同様の方法によって、両写本の関係を確認しようと試みる。

調査結果は、次のようにまとめることができる。仮名字母の出現傾向を用いた写本の分類結果から、山岸文庫本は、その書写者との指摘がある甘露寺親長による写本である蓋然性が高い。また、高松宮家本『源氏物語』にも甘露寺親長筆写本を仮名字母まで忠実に書写した可能性がある写本が存在する。本行本文の表記が類似する写本の分類結果から、両写本には「字配が一致する関係」や「共通の親本を持つ関係」にある巻が指摘できる。このうちの一部の巻は両写本の行末の文字が一致する箇所が複数存在し、どちらかを親本として書写した関係にあると考えられる。これらの結果は、書写年代が先行する山岸文庫本を親本として高松宮家本を書写した「親子関係」説の蓋然性を高めていると考えられる。

二 本調査の目的と位置付け

本研究の目的は、『源氏物語』写本文の用字に着目して、その伝写関係を指摘することである。公開され利用が容易な『源氏物語』写本には奥書が書かれていない場合が多く、その写本間関係を指摘できる事例は限られている。本研究では、写本文の持つ用字の類似性に着目して、本文の流通や伝来に関係していると考えられる写本を探索し、その伝写関係を明らかにすることを試みる。

本研究では、写本を転写する際に発生する本文の用字の変化に着目する。親本とした写本の本文の用字は、転写時に書写者によって変更される可能性が高い。このため、基本的には用字が一致するまたは類似する写本文の存在は少ないと考えられる。加えて、異なる書写者が任意に用字を書き換えて書写した写本文が偶然類似する可能性はさらに低いと考えられる。つまり、用字が類似する写本文の存在は稀であり、存在するとすれば共通の親本から転写

されたといった何らかの理由があると推定できる。それゆえ、用字が類似する写本が指摘できれば、それらは本文の流通や伝来に関係していると考えることができる。この特徴を持つ本文を探索するためには、大量の写本が必要となるので、本文の用字に対する統計的分類方法を導入し調査する。

本調査では、山岸文庫本と高松宮家本を調査対象とし、統計的分類方法を用いて、その伝写関係を明らかにすることを試みる。両写本に関しては、山岸文庫本には解題^{〔2〕}が、また、高松宮家本には解説^{〔1〕}が利用でき、具体的な書写の様相の指摘^{〔3〕}もあり、書誌に関する情報が豊富である。このため、書誌情報によって、本文の用字の統計的分類結果に基づいた本調査結果の考察の妥当性を検討できる利点がある。また、従来の文献学の定性的な方法とは異なる、定量的な方法を用いた本調査結果によって、書誌情報の蓋然性を高めることができる利点もある。報告されている定性的な分析結果である書誌情報と、本方法で採用した定量的な分析結果である分類された写本群を比較することで、これまで不明であった写本間関係を指摘し、その写本の流通や伝来的一端を明らかにできる可能性がある。

三 調査対象写本と本文データ、調査方法

調査対象写本は、甘露寺親長(一四二四～一五〇〇)が書写に関わったとされる山岸文庫本と高松宮家本である。両写本に関係する研究史や書誌に関する概要は、前節で述べた解題や解説によって報告されているため、本稿では省略する。ここでは本文の用字の分類結果を考察する際に関連する内容に関してまとめる。本文データと調査方法は前稿^{〔4〕}と同様であるため、概要を述べている。

三：一 調査対象写本の概略

山岸文庫本は、五十四帖揃いの写本である。そのうち基幹本二十七帖は甘露寺親長筆とされ、残り二十七帖は補写である。本稿では親長筆とされる巻を調査対象とする。親長筆の巻は、巻序に従うと、「澗標」「蓬生」「薄雲」から「乙女（ママ）」「胡蝶」「常夏」「野分」から「真木柱」「若菜上」「柏木」「横笛」「御法」「匂兵部卿（ママ）」「竹河」から「夢浮橋」である。奥書によると、「澗標」「蓬生」「薄雲」は延徳三（一四九二）年に書写され、それ以外の巻は文明十一（一四七九）年から文明十七（一四八五）年に書写されている。異なる書写年代の巻が混在している理由は明らかではない。

高松宮家本は、五十四帖揃いの写本である。その伝称筆者は巻末と古筆了意による筆者目録に記載がある。巻末と目録の伝称筆者は、一部異なっている。本稿では巻末の伝称筆者を用いて調査している。このうち「紅葉賀」は甘露寺親長が長享二（一四八八）年に書写している。

調査対象には、この他に、甘露寺親長筆とされる大正大学本『源氏物語』の「夕顔」を加えた。この「夕顔」の書写年代は明らかではないが、他の巻の書写年代から、大正大学本は延徳二（一四九〇）年前後に書写されたと考えられる写本である。調査対象とした写本は合計八十二写本である。

両写本の書写年代を比較すると、山岸文庫本の多くの巻は高松宮家本に先行して文明年間に書写され、その後、一部の山岸文庫本が延徳三年に書写されたと考えられる。高松宮家本「桐壺」の奥書には、文明十一年に「桐壺」を親長が書写したことを示す本奥書がある。この奥書から高松宮家本の親本は山岸文庫本の可能性が指摘されている^[3]。

三：二 作成した本文データ

本文データは、行ごとに本文の漢字と仮名字母を入力した、写本と同一の行数を持つ文字データである。調査対象

とした本文は本行本文である。傍記は、本行本文と同筆であるとの判断が困難であるため調査対象としていない。漢字と仮名の区別については、一音で読む漢字を仮名と見做す方針を採用した。この結果、作成した本文データは、写本本文の仮名字母や、漢字と仮名の使い分け、誤写、脱落を反映した文字データとなっている。

本文の調査範囲は、巻頭から漢字と仮名を合計して五千五百文字程度の本文であり、巻の全文ではない。これまでの調査結果から、全文を調査しなくとも、五千五百文字程度の本文に出現する仮名字母や表記の調査によって、その特徴を明らかにできることが示されている⁵。全文を調査対象とした巻は「空蟬」「花宴」「花散里」「関屋」「初音」「篝火」「行幸」「藤袴」「鈴虫」「匂宮」「紅梅」「早蕨」である。これらは「行幸」と「早蕨」を除き、本文文字数が五千五百文字に満たない巻、またはそれに近い巻である。両写本の調査対象範囲の仮名文字数、仮名字母数、漢字を加えた総文字数、その漢字出現率を本稿末の【表一】にまとめた。【表一】では、高松官家本の各巻末にある伝称筆者も記載した。高松官家本の各種の文字数に関しては既に報告済み⁴、⁶であるが、本稿の内容で関連するため【表一】に記載している。

三・三 調査方法

調査では、作成した本文データから調査目的に応じて必要なデータを抽出や変換して分析に用いている。仮名字母の出現傾向の調査では、本文データのうち、仮名字母だけを分析対象として集計している。本文表記の調査では、本文データの漢字と仮名を通行化したデータを作成し、分析対象として処理している。

仮名字母と本文表記の調査に用いた統計処理方法では、書誌情報といった分類結果に関する情報を用いずに、本文データの持つ特徴だけに基づいて分類する。書誌情報は分類結果を考察する際に用いる⁷。

三・三・一 仮名字母の出現傾向に基づく分類

仮名字母の出現傾向の調査方法の概略は次の通りである。作成した本文データに出現する仮名字母を、同音の仮名ごとに集計し、その割合を求める。出現する全仮名字母の割合を仮名字母の出現傾向と呼ぶ。これを対象に、分類を目的とする統計処理を適用し、調査対象とした写本を分類する。この方法を用いた、これまでの調査結果から、同筆とされる写本の本文の仮名字母の出現傾向は類似し、他筆とされる写本の本文とは異なることが明らかになっている〔8〕。

三・三・二 本文表記の比較と詳細

本文表記の調査方法の概略は次の通りである。作成した本文データの漢字と仮名を通行化する。そのデータを先頭文字から順に一文字ずつずらしながら一定の文字数に分割する。分割された本文の断片文字列を集計し、その頻度に対して、分類を目的とした統計処理を行う。この方法を用いた調査結果から、本文表記が類似する写本は、同系統の写本の中でも、同一の伝称筆者が関わっている写本や近い時期に書写された写本であることが多いため、その写本文の伝来は何らかの関係があることが明らかになっている〔9〕。

加えて、本調査では、本文表記が類似する写本の詳細を確認した。本文表記の相違は漢字と仮名の使い分けや仮名遣い、音便が異なることよって発生するが、その詳細は明らかではない。そこで、調査対象とした写本のうち、本文表記が類似する巻を選択し、その相違の内訳を明らかにすることとした。

四 仮名字母の調査結果と考察

仮名字母の出現傾向の調査結果を【図一】に示す。【図一】で分類した各写本には、巻名の他に伝称筆者名も示している。【図一】では、同筆の可能性がある写本群の背景を灰色で示している。

【図一】は、山岸文庫本二十七帖全てが写本群に含まれ、同筆の可能性があることを示している。それらと同筆の可能性がある写本として、高松宮家本の複数の写本が存在する。山岸文庫本は、花押と高松宮家本「紅葉賀」の筆跡の一致から親長筆と考えられ^{〔2〕}、今回の調査によって伝称筆者に親長とある大正大学本「夕顔」もこの写本群に分類されていることから、これらは親長筆写本と考えることができるだろう。

同時に、この写本群には、親長筆でない高松宮家本が複数含まれている。特に、伝称筆者に知恩院隆句権僧正と指摘される写本は、十一写本と多く含まれている。また、それぞれ異なる伝称筆者が指摘される「横笛」「須磨」「竹河」「花宴」「葵」「東屋」もこの写本群に含まれている。

過去の調査^{〔6〕}において、高松宮家本を分類すると、伝称筆者が異なるにもかかわらず同筆の可能性がある写本が存在し、それらが群を構成することがあった。これらの写本は、伝称筆者の他に書誌情報がなく、その仮名字母の出現傾向が類似する理由が明らかでないため、分類結果に基づいた考察をそれ以上進めることができなかつた。今回、親長筆とされる山岸文庫本を加えて再分類した結果、親長筆写本と同筆の可能性がある、異なる書写者による高松宮家本の写本は、親長筆写本を親本として忠実に書写した写本と考えられることが明らかになった。その根拠は、これら写本は、複数の異なる伝称筆者によって書写されているにもかかわらず、親長という一人の写本の仮名字母の出現傾向に類似するという事実である。この様な事実が発生する最も簡潔な説明としては、親長筆写本を親本として、そ

の仮名字母まで忠実に書写したと考えることが適切であろう。この結果は、筆跡や伝称筆者の調査だけでは明らかにできず、本調査方法により初めて指摘できた知見である。既に、高松宮本の親本は山岸文庫本であると指摘がある³⁾。本調査結果は、その指摘とは異なる方法によって山岸文庫本と高松宮家本の「兄弟関係」説よりも「親子関係」説の蓋然性を高めたと言える。

以上のことから、延徳三年に書写された「滯標」「蓬生」「薄雲」を除く山岸文庫本は高松宮家本の親本と考えることができる。両写本は親子関係にある写本を考察する際に参考となる事例になるだろう。

五 本行表記の調査結果と考察

本文表記を用いて、両写本を分類した結果を【表二】に示す。【表二】では、本文が類似するとの指摘がある写本に対して本方法を適用した結果に基づき、本文表記の類似性の程度を「臨模されている関係」「字配が一致する関係」「共通の親本を持つ関係」「同系統内で本文異同が少ない関係」の四段階に分類し、それぞれ記号を用いて示している。本文の類似性は「臨模されている関係」から「同系統内で本文異同が少ない関係」の順序で低下する。表中の◎は「字配が一致する関係」、○は「共通の親本を持つ関係」、●は「同系統内で本文異同が少ない関係」を示す。斜線は親長筆の山岸文庫本が存在しないことを示す。

【表二】本文表記に基づく分類結果

巻名	表記	巻名	表記
01- 桐壺		33- 藤裏葉	
02- 箒木		34- 若菜上	○
03- 空蟬		35- 若菜下	
04- 夕顔		36- 柏木	◎
05- 若紫		37- 横笛	◎
06- 末摘花		38- 鈴虫	
07- 紅葉賀		39- 夕霧	
08- 花宴		40- 御法	◎
09- 葵		41- 幻	
10- 賢木		42- 匂兵部卿	○
11- 花散里		43- 紅梅	
12- 須磨		44- 竹河	◎
13- 明石		45- 橋姫	●
14- 滯標	○	46- 椎本	●
15- 蓬生	●	47- 総角	○
16- 関屋		48- 早蕨	●
17- 絵合		49- 宿木	●
18- 松風		50- 東屋	○
19- 薄雲	○	51- 浮舟	○
20- 朝顔	●	52- 蜻蛉	
21- 少女	○	53- 手習	◎
22- 玉鬘		54- 夢浮橋	
23- 初音			
24- 胡蝶	○		
25- 蛍			
26- 常夏	◎		
27- 篝火			
28- 野分	○		
29- 行幸	●		
30- 藤袴	●		
31- 真木柱	○		
32- 梅枝			

五. 一 本文表記の類似性

【表二】からは、「字配が一致する関係」や「共通の親本を持つ関係」にあると考えられる巻を指摘できる。この分類結果は、これまでの『源氏物語』写本の調査結果が「同系統内で本文異同が少ない関係」にある写本が多いこと¹⁰⁾と比較すると、両写本の本文表記の類似性が高く、密接な関係があることを示している。調査対象とした山岸文庫本二十七帖のうち、六帖が「字配が一致する関係」に、十一帖が「共通の親本を持つ関係」に、八帖が「同系統内で本文異同が少

ない」関係にある。関係が指摘できなかつた二帖は「蜻蛉」と「夢浮橋」であつた。

「字配が一致する関係」にあると指摘できる六帖のうち「常夏」と「竹河」、「共通の親本を持つ関係」にあると指摘できる十一帖のうち「胡蝶」は、冒頭に近い本文のうち、行末の文字まで一致して書写されている行が複数存在する。これは両写本のどちらかを親本として書写したと考えられる根拠となるだろう。山岸文庫本「常夏」の書写年代は文明十一年、「竹河」の書写年代は文明十五年、「胡蝶」の書写年代は文明十四年である。各写本の書写年代は高松宮家本に先行する。この事実からも山岸文庫本を親本として高松宮家本を書写されたと考えることができ、「親子関係」説の蓋然性を高めたとと言える。

仮名字母の出現傾向の調査と本文表記の調査の関係を述べると、仮名字母まで忠実に書写している巻は、その本文表記も「字配が一致する関係」または「共通の親本を持つ関係」にあることが多い。これは、仮名字母まで忠実に書写すると同時に漢字と仮名の使い分けも一致するように書写するようになることが理由であると考えられる。

五・二 本文表記の詳細

前節において、山岸文庫本と高松宮家本には本文表記が類似する巻が多いことを指摘した。しかし、その類似性の詳細である、本文表記の相違が発生する要因の内訳は明らかではなく、類似性の程度の差を生む原因は不明のままである。そこで、本文表記の類似性が異なる程度を持つ巻を取り上げて、各写本の本文表記の詳細分析を行う。調査対象には、「字配が一致する関係」にある「柏木」、「共通の親本を持つ関係」にある「滲標」、「同系統内で本文異同が少ない関係」にある「早蕨」を選択した。加えて、山岸文庫本との比較対象として尾州家本も加えた。これら三巻において、山岸文庫本と尾州家本は全て「同系統内で本文異同が少ない関係」にある。尾州家本のうち「滲標」「早蕨」は室町時代

前期の補写である。本文表記の比較は、山岸文庫本と尾州家本、山岸文庫本と高松宮家本の間で行う。山岸文庫本と高松宮家本の表記は類似しているため、尾州家本と高松宮家本の比較は省略している。

本文表記の相違が発生する要因には、(1)漢字と仮名、(2)本文異同、(3)送り仮名、(4)仮名遣い、(5)音便、(6)誤写やその修正、(7)慣用の読み、(8)手擦れや汚損、虫損を指摘することができる。これらによって発生する本文表記の相違の頻度と割合を調査した。仮名遣いや音便は、その種類ごとにさらに細分化して集計することも可能である。今回の調査では、本文表記の相違の概要を把握するため、細分化した集計は行っていない。

写本間の本文表記の相違の発生率の概算値として、調査対象範囲の本文文字数に占める相違の発生箇所数を用いた。本文表記の相違を異なる巻とも比較するためには、何らかの数値指標が必要である。しかし、漢字と仮名の相違や脱落の有無によって本文文字数が変化するため、単純に相違している文字数を用いるだけでは適切な指標にはならない。そこで、異同の発生する可能性がある箇所の概算値として本文文字数を用いて分母とし、本文表記の相違を分子として発生率を求めた。ここで求めている本文表記の相違の発生率は、正確性には劣るが、巻間で統一的に比較可能な数値であるため用いている。

各写本の本文表記の相違の表では、左側に山岸文庫本と尾州家本の、右側に山岸文庫本と高松宮家本の相違の数値をまとめている。表頭にある数値は本文表記の相違の発生率である。表側に本文表記の相違を示し、各項目の頻度とその割合を記載している。

五・二・一 「柏木」の調査結果

山岸文庫本の本文文字数は5720文字あり、尾州家本と比較して本文表記の相違が発生している箇所は計79であっ

た。その発生率は1.4%である。高松宮家本の本文文字数は㊦㊧㊨文字あり、山岸文庫本と比較して本文表記の相違が発生している箇所は計㊩であった。その発生率は0.2%である。その内訳を【表三】にまとめた。

山岸文庫本と尾州家本の本文表記は、「同系統内で本文異同が少ない関係」にある。両写本の表記の相違の発生要因の半数が(1)漢字と仮名の使い分けである。以下、(2)本文異同、(5)音便、(6)誤写やその修正の順で発生している。

山岸文庫本と高松宮家本の本文表記は、「字配が一致する関係」にある。本文表記が非常に類似するため、相違の発生率も極めて低い。両写本の表記の相違の発生要因は(6)誤写やその修正と、(2)本文異同、(1)漢字と仮名の使い分けしか発生せず、偶然発生する誤写を除けば、発生箇所も極めて少ない。

五・二・二 「潜標」の調査結果

山岸文庫本の本文文字数は㊦㊧㊨文字あり、尾州家本と比較して本文表記の相違が発生している箇所は計㊩であった。その発生率は2.8%である。高松宮家本の本文文字数は㊦㊧㊨文字あり、山岸文庫本と比較して本文表記の相違が発生している箇所は計㊩であった。その発生率は0.7%である。その内訳を【表四】にまとめた。

表記の相違	尾州家本 1.4%		高松宮家本 0.2%	
	頻度	割合	頻度	割合
(1)漢字と仮名	43	54.4%	2	14.3%
(2)本文異同	12	15.2%	5	35.7%
(3)送り仮名	0	0.0%	0	0.0%
(4)仮名遣い	5	6.3%	0	0.0%
(5)音便	10	12.7%	0	0.0%
(6)誤写と修正	9	11.4%	7	50.0%
(7)慣用の読み	0	0.0%	0	0.0%
(8)手擦れ他	0	0.0%	0	0.0%

【表三】「柏木」の表記の相違

【表四】「滯標」の表記の相違

表記の相違	尾州家本 2.8%		高松宮家本 0.7%	
	頻度	割合	頻度	割合
(1)漢字と仮名	129	70.5%	21	43.8%
(2)本文異同	24	13.1%	6	12.5%
(3)送り仮名	3	1.6%	8	16.7%
(4)仮名遣い	19	10.4%	7	14.6%
(5)音便	4	2.2%	4	8.3%
(6)誤写と修正	4	2.2%	2	4.1%
(7)慣用の読み	0	0.0%	0	0.0%
(8)手擦れ他	0	0.0%	0	0.0%

山岸文庫本と尾州家本の本文表記は、「同系統内で本文異同が少ない関係」にある。両写本の表記の相違の発生要因の三分の二以上が(1)漢字と仮名の使い分けである。以下、(2)本文異同、(4)仮名遣い、(5)音便と(7)誤写やその修正の順で発生している。

山岸文庫本と高松宮家本の本文表記は、「共通の親本を持つ関係」にある。本文表記が類似するため、相違の発生率も低い。両写本の表記の相違の発生要因は(1)漢字と仮名の使い分け、(3)送り仮名、(4)仮名遣いの順に発生している。

五. 二. 三 「早蕨」の調査結果

山岸文庫本の本文文字数は8196文字あり、尾州家本と比較して本文表記の相違が発生している箇所は計857であった。その発生率は3.1%である。高松宮家本の本文文字数は8072文字あり、山岸文庫本と比較して本文表記の相違が発生している箇所は計

131であった。その発生率は1.6%である。その内訳を【表四】にまとめた。

【表五】「早蕨」の表記の相違

表記の相違	尾州家本 3.1%		高松宮家本 1.6%	
	頻度	割合	頻度	割合
(1)漢字と仮名	187	72.8%	115	87.8%
(2)本文異同	32	12.5%	3	2.3%
(3)送り仮名	4	1.6%	1	0.8%
(4)仮名遣い	14	5.4%	4	3.1%
(5)音便	13	5.1%	5	3.8%
(6)誤写と修正	6	2.3%	3	2.3%
(7)慣用の読み	1	0.4%	0	0.0%
(8)手擦れ他	0	0.0%	0	0.0%

山岸文庫本と尾州家本の本文表記は、「同系統内で本文異同が少ない関係」にある。両写本の表記の相違の発生要因の三分の二以上が(1)漢字と仮名の使い分けである。以下、(2)本文異同、(4)仮名遣い、(5)音便の順で発生している。

山岸文庫本と高松宮家本の本文表記は、「同系統内で本文異同が少ない関係」にある。両写本の表記の相違の発生要因は(1)漢字と仮名の使い分け、(5)音便、(4)仮名遣いの順に発生している。

五. 二. 四 考察

「共通の親本を持つ関係」にある写本では、表記異同の発生率が0.5%以下であること、「字配が一致する関係」にある写本では、その発生率が1%程度であること、「同系統内で本文異同が少ない関係」にある写本では、その発生率が3%程度である。本文表記の類似性の程度と表記の相違の発生率は相関していると言え、概算値としておおよそ正しいと考えられる。

本文表記の相違の内訳を確認したところ、その相違の最大の発生要因は基本的には漢字と仮名の使い分けであることが明らかになった。親子関係があると考えられる山岸文庫本と高松宮家本であっても漢字と仮名の使い分けが発生し、発生する場合には最も頻度が多いことから、漢字と仮名は、書写者が任意に変更していると考えられる。但し、

漢字と仮名の使い分けの全体的な傾向に関しては、時代が下る写本ほど漢字の出現率が増えるという関係には必ずしもなっていない。相対的に書写年代が古い尾州家の漢字表記を、新しい写本である山岸文庫本では仮名表記に変更する場合も多い。特定の単語に関しては漢字を用いる傾向がある本文も存在する。山岸文庫本と高松宮家本の比較から、漢字の使用に関しては、書写年代だけではなく書写者の習慣といった要因も考える必要があるだろう。

全相違に占める本文異同や脱落の割合が小さいことから、本文表記が類似する写本とは漢字と仮名の使い分けが類似する写本である可能性が高い。前述した通り、これまでの調査結果では、本文表記が類似する写本は、同系統の写本の中でも同一の伝称筆者が関わっている写本や同時代の写本であることが多いため、漢字と仮名の使い分けを共有する本文は、その流通や伝来に関係している可能性があるとも考えられる。この点に関しては、今後、本文表記によって分類した写本の本文とその書誌情報を検討して、考察を深めたい。

六 まとめと今後の課題

本稿では、山岸文庫本と高松宮家本の関係を明らかにするために、両写本の仮名字母の出現傾向と本文表記を調査対象として、その類似性を調査した。仮名字母の出現傾向の調査結果からは、甘露寺親長筆とされる山岸文庫本と、高松宮家本の一部の写本が同筆の可能性が指摘された。複数の異なる書写者による高松宮家本の写本が、親長筆写本と同筆の可能性があるという調査結果からは、高松宮家本が親長筆の写本を仮名字母まで忠実に書写した可能性を指摘できる。本文表記の調査結果からは、両写本の間には、「字配が一致する関係」にある六帖、「共通の親本を持つ関係」にある十一帖を指摘した。本文表記が類似すると考えられる写本の存在は稀であると考えられることか

ら、両写本が密接な関係にあることが指摘できる。さらに、一部写本においては、表記に加えて行末の文字まで一致することを指摘した。これら二つの調査結果から、その写本間関係は、書写年代が先行する巻に関しては、山岸文庫本を親本として高松宮家本を書写した「親子関係」にある蓋然性が高いことを指摘した。

これまで本調査方法は、書写者の推定や伝来に関係がある写本の探索に用いていた。今回の調査により、複数の調査方法から得られた知見と書誌情報を組み合わせることで、親子関係にある写本をより具体的に考察できることを示した。今後は、写本文文に対して異なる調査方法を検討し、本文を新たな切り口から調査したいと考えている。

注及び参考文献

- [1] 山岸徳平「高松宮御蔵河内本源氏物語解説」臨川書店昭和五十(一九七八)年三月、昭和六十三(一九八八)年十月
- [2] 上野英子「山岸文庫蔵『耕雲本源氏物語』解題(調査報告49)」実践女子大学文芸資料研究所『年報』第一五号 pp.118-130
三〇三平成八(一九九六)年三月
- [3] 加藤洋介「青表紙本源氏物語目移り攷」京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』第七〇巻第八号 平成十三(二〇〇一)年八月
- [4] 齊藤鉄也「後相原院本『源氏物語』の仮名字母と本文表記―室町時代写本との比較を通して―」実践女子大学文芸資料研究所『年報』第四二号 pp.六五-九三 令和五(二〇二三)年三月
- [5] 仮名字母の出現傾向に関する調査報告としては、齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた池田本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム じんもんこん 2020 論文集 Vol.2020 No.1 pp.121-128 令和二年(二〇二〇)十二月が、本文表記に関する調査報告としては、齊藤鉄也「本文表記のNgramを用いた室町時代書写の源氏物語写本の分類」情報処理学会論文誌 Vol.63 No.22 pp.347-354 令和四(二〇二二)年二月がある。
- [6] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた『源氏物語』写本の調査」人文科学とコンピュータシンポジウムじんもんこん 2022

論文集 Vol.2022 No.1 pp.263-270. 令和四(二〇二二)年十一月

- [7] 本調査では「教師なし分類方法」を用いている。書誌情報といった分類する際の「正解」となる情報のことを「教師情報」という。教師なし分類方法では、この「教師情報」を用いずに分類するため、「教師なし」という表現を用いる。教師なし分類方法には複数の手法がある。調査に用いた教師なし分類方法は階層的クラスター分析である。階層的クラスター分析では、調査対象間もデータの類似性を数値である距離で表す。この距離に基づいて調査対象を分類する。仮名字母の調査では、写本間距離の計算方法に「R 距離(金明哲「テキストデータの統計科学入門」岩波書店 2011)」を、群間距離の計算方法に群平均法を用いた。本文表記の調査では、写本間距離の計算方法に cosine 距離を、群間距離の計算方法に群平均法を用いた。
- [8] これまでの仮名字母の出現傾向の調査結果に基づき、同筆の可能性が高い写本間距離は 161 としている。また、仮名字母の出現傾向が同一と見做せる写本間距離を 066 としている。この数値によって、階層的クラスター分析の結果を評価し、写本を分類する。詳細は「5」の仮名字母の出現傾向に調査報告にて述べている。

[9] 本文表記の調査に用いた、分割した Σ 文字の本文の断片文字列のことを Ngram と言う。調査では、本文を五文字に分割したため、5gram と呼ぶ。この五文字の本文の断片を集計して分類に用いる。Ngram を用いる文字列処理は、自然言語処理分野の基礎的な技術の一つである。Ngram は、文書の分類や検索に用いられることがある。

[10] 齊藤鉄也「Ngram を用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(3)——書陵部蔵三条西家本・吉川史料館蔵青表紙本・日本大学蔵三条西家本・蓬左文庫蔵三条西家本との比較を通して——」実践女子大学文芸資料研究所年報 四一号 pp.77-128 令和四(二〇二二)年三月

(淑徳大学教授)

【表二】調査対象とした源氏物語写本の文字数

巻名	山岸文庫蔵耕雲本				高松宮家本				各巻末の伝称筆者
	仮名数	字母数	総字数	漢字率	仮名数	字母数	総字数	漢字率	
01-桐壺					6039	101	6457	6.5%	近衛政家
02-帚木					6036	118	6380	5.4%	就山知藏
03-空蝉					4600	106	4825	4.7%	冷泉為広
04-夕顔					5873	100	6155	4.6%	万里小路春房/宗山等貴
05-若葉					6010	118	6238	3.7%	甘露寺元長
06-末摘花					6006	92	6249	3.9%	中御門宣胤
07-紅葉賀					6007	94	6598	9.0%	甘露寺親長
08-花宴					4395	95	4821	8.8%	実相院増運准后
09-葵					6721	105	7138	5.8%	妙法院宮寛胤法親王
10-賢木					6110	95	6642	8.0%	宗山侍史
11-花散里					1752	80	1820	3.7%	知恩院隆句権僧正
12-須磨					5839	95	6245	6.5%	範意大徳
13-明石					6085	98	6430	5.4%	一条冬良
14-滯標	6075	94	6541	7.1%	6075	95	6540	7.1%	今出川公興
15-蓬生	6580	91	6895	4.6%	6628	109	6921	4.2%	伏見宮邦高親王
16-圓屋					2070	86	2158	4.1%	知恩院隆句権僧正
17-絵合					5392	119	6050	10.9%	姉小路基綱
18-松風					5282	122	5750	8.1%	三条西実隆
19-薄雲	5850	87	6134	4.6%	5884	109	6158	4.4%	勸修寺政頼
20-朝顔	5758	83	5964	3.5%	5223	97	5508	5.2%	飛鳥井雅康
21-少女	5687	89	6106	6.9%	5638	104	6083	7.3%	一条冬良
22-玉鬘					5245	110	5527	5.1%	飛鳥井(木幡)雅冬
23-初音					6214	94	6512	4.6%	知恩院隆句権僧正
24-胡蝶	6023	91	6342	5.0%	5996	92	6324	5.2%	知恩院隆句権僧正
25-蛩					6227	101	6574	5.3%	山内政綱
26-帝夏	6225	90	6562	5.1%	6227	90	6569	5.2%	知恩院隆句権僧正
27-篝火					1326	86	1447	8.4%	知恩院隆句権僧正
28-野分	6711	96	7172	6.4%	6680	97	7164	6.8%	知恩院隆句権僧正
29-行幸	11103	103	12149	8.6%	11135	107	12160	8.4%	山内政綱
30-藤袴	5836	95	6265	6.8%	5744	108	6221	7.7%	
31-真木柱	6692	93	7060	5.2%	6690	96	7059	5.2%	知恩院隆句権僧正
32-梅枝					5480	97	5977	8.3%	曼珠院良鎮大僧正
33-藤裏葉					5426	98	5909	8.2%	宗山侍史
34-若葉上	5965	91	6367	6.3%	5985	92	6396	6.4%	知恩院隆句権僧正
35-若葉下					5655	90	6167	8.3%	知恩院隆句権僧正
36-柏木	5477	89	5720	4.2%	5506	101	5748	4.2%	今出川公興
37-横笛	5549	91	5905	6.0%	5550	94	5908	6.1%	花山院政長
38-鈴虫					5996	107	6457	7.1%	光房法眼/山内政綱
39-夕霧					5710	106	6096	6.3%	中御門宣秀
40-御法	5809	92	6291	7.7%	5792	93	6277	7.7%	知恩院隆句権僧正
41-幻					6469	96	6900	6.2%	知恩院隆句権僧正
42-匂宮	5843	93	6337	7.8%	5844	94	6347	7.9%	知恩院隆句権僧正
43-紅梅					4882	89	5204	6.2%	知恩院隆句権僧正/宗山等貴
44-竹河	5689	89	6148	7.5%	5691	89	6152	7.5%	唐橋在数
45-橘姫	4699	84	5136	8.5%	4717	105	5150	8.4%	冷泉政為
46-椎本	5556	94	6031	7.9%	5554	106	6035	8.0%	東坊城和長
47-総角	5449	88	5850	6.9%	5465	88	5863	6.8%	竹屋治光
48-早蕨	7810	95	8196	4.7%	7584	108	8072	6.0%	中御門宣秀
49-宿木	5515	88	6024	8.4%	5526	101	6041	8.5%	
50-東屋	5503	95	5956	7.6%	5538	97	5988	7.5%	
51-浮舟	5288	87	5749	8.0%	5272	102	5737	8.1%	
52-蜻蛉	5253	92	5748	8.6%	5117	116	5694	10.1%	中院通世
53-手習	5169	87	5591	7.5%	5166	97	5591	7.6%	大僧都空濟
54-夢浮橋	5065	89	5602	9.6%	5081	115	5648	10.0%	

【図二】仮名字母の出現傾向に基づく山岸文庫本と高松宮家本の分類結果

